植物学名の読み方

加 藤 良 一　2023年8月31日

植物学者牧野富太郎の生涯を描くNHK朝ドラ「らんまん」（2023年7月17日放送）で、新種植物の命名における研究者の競争の場面が扱われていました。学問の世界にも競争原理が働くという現実をいやがうえにも見せつけられ、その厳しさが伝わってくるものでした。

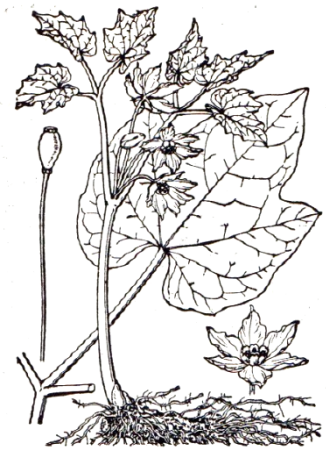
そこで話題になった植物がトガクシソウ（戸隠草）です。学名を *Ranzania japonica* (T.Itô ex Maxim.)T.Itô、シノニム[※1]は *Podophyllum japonicum* T.Itô ex Maxim.と呼ばれるものです。

※1：生物の命名法におけるシノニム（synonym）とは、同一と見なされる分類群（種や属など）に付けられた学名が複数ある場合に、そのそれぞれをいう。ある学名がシノニムであると言う場合、一般的な文脈では「正しい」学名ではないという意味を包含していることが多いが、命名規約の上では「正しい」学名もシノニムに含まれる。

Ranzania japonica (T.Itô ex Maxim.) **T.Itô**

属名　　種形容語　　（著者名）　　著者名

和名：トガクシソウ



745.　とがくしそう（とがくししょうま）　〔めぎ科〕

Ranzania japonica *T. Ito.*

（＝Podophyllum japonicum *T. Ito*）

中部や北部の深山の樹の下にはえる多年生草本．地下には横にはった節の多い根茎があり，その先から茎をのばして直立し，高さ30cmぐらいになる．茎の先に2個の3出葉がある．花がすむと葉は伸び，小葉は円形あるいは卵円形で，先端は鋭形，基部は心臓形で，あらい欠刻状のきょ歯があり，膜質，無毛である．5月頃2個の葉の間から散形花序を出し，長い柄のある美しい淡紫色の花を開き，やや点頭する．花径は約2〜3cmである．がく片は6個，卵状皮針形で花弁状，先は鋭形で，ふちがやや波状である．花弁はがく片よりはるかに小形で，6個が集まって鐘形となり，めしべとおしべを囲んでいる．おしべは6個で，やくは弁で開き，おしべが物に触れた瞬間に運動するのは，メギと同様である．めしべには子房が1個ある．秋になると卵状楕円形の液果が実る．学名は，有名な本草学者小野蘭山の名が用いられているが，元来小野蘭山とこの草とは何の因縁もない．初めMaximowicz氏により，Yatabea japonica *Maxim.* という学名が与えられたのであるが，この名は公にならなかった．〔日本名〕長野県の戸隠山で初めて採集されたのにちなんだものである．一名を戸隠升麻ともいう．

（牧野新日本植物図鑑より）

植物の学名は国際命名規約[※2]によって<u>ラテン語で書くのが原則</u>とされています。ところが、ラテン語を今でも母国語（公用語）としている国はバチカン市国だけで、他の国においてはすでに「死語」になっているといいます。そうはいいながら、バチカン市国以外でも、教会で使うラテン語はとくに「教会ラテン語」と

呼ばれる、イタリア語の影響を受けたラテン語だといいます。したがって、これらは現在でも、生きたラテン語なので「死語」ではないということになります。

※2　国際藻類･菌類･植物命名規約は、国際植物学会議命名部会によって、6年ごとの会議で改正される、植物の学名を決める際の唯一の国際的な規範である。同様の任にある国際動物命名規約、国際原核生物命名規約とあわせて、生物の学名の基準となっている。

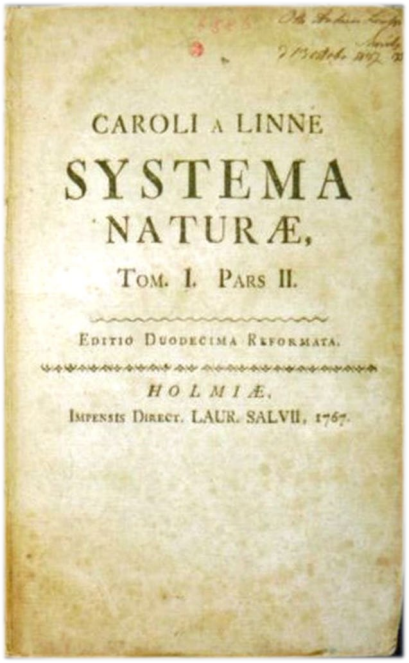
科学の世界で使用するラテン語が、時代によって変化するようでは、混乱が生じてしまいます。見方によっては、「死語」となったほうが、その後の変化が止まるので、科学にとっては好都合ともいえるのです。

分類学は、アリストテレスにはじまり、リンネにより確立

人類は、外界のものを認知し識別するために、「分ける」ことと「まとめる」ことを営々と続けています。生物の体系的な分類を最初に行ったのはアリストテレスで、自然界にあるものを「自然の階梯(かいてい)」と位置づけ、単純なものから複雑なものへと「連続的に移りゆく」システムとして描きました。

近代的な分類学は、スウェーデンの博物学者、生物学者、植物学者であったカール･フォン･リンネ(1707-1778)によって築かれました。

現在でも学名に使われている「二名法」は、彼の著書『自然の体系(Systema Naturae)』(☞)に記載されています。この著書には、アリストテレスの階段状に上下につながる分類体系ではなく、階層的な枝分かれしてゆく分類表を提案しています。これらのことからリンネは「分類学の父」と称されています。


CAROLI A LINNE
SYSTEMA
NATURÆ,
TOM. I. PARS II.
EDITIO DUODECIMA REFORMATA.
HOLMIÆ,
IMPENSIS DIRECT. LAUR. SALVII, 1767.

二名法

二名法は、冒頭に書いたトガクシソウに示されるように、「属名」に続き「種形容語」の2個の名前で書きます。人の名前が姓名の二つでできているのと同じです。また、発見者･命名者にあたる「著者名」は、通常は省略してもよいが、正確を期す場合には書くことが推奨されています。いずれにしても、学名に名前や関連した事項が使われるのは研究者としてこの上ない名誉なことです。そこで新種と確認できたときは、他の研究者より一歩でも早く正式に公表し、命名の権利を獲得するために鎬(しのぎ)を削るわけです。

“*Ranzania japonica* (T.Itô ex Maxim.)T.Itô”のように著者名に“ex”が付いているのは、“T.Itô”が命名したが出版はしなかったため、それを“Maxim.”(Maximowicz)が記載して出版したことを意味しています。

Maximowicz(マキシモビッチ:1827-1891)は、19世紀のロシアの植物学者で、専門は被子植物の分類、ペテルブルク帝立科学アカデミーの会員でした。極東アジア地域を現地調査し、多数の新種について学名を命名しており、日本との関わりは大きく影響力も絶大なものがあったようです。牧野富太郎も日本で行き場を失ったときに、マキシモビッチの元へ行こうと考えていた矢先に、ロシアからマキシモビッチ死亡の知らせが届き渡航を断念しました。

学名はアルファベット26文字で

学名に使用される文字は、英語のアルファベットと同じ26文字であり、カタカナ、漢字、アラビア文字、ハングル文字などは使用できず、数字や記号もだめです。ただし、ハイホン「－」だけは例外的に認められています。

学名の命名・表記方法については、それぞれの分野で取り決められています。植物分野に限れば、原種植物の学名は、国際藻類・菌類・植物命名規約、栽培植物については、栽培植物命名国際規約によりそれぞれ命名しなければなりません。

国際藻類・菌類・植物命名規約の概要

① 属名(頭文字は大文字で)、種形容語、変種形容語はイタリックで表記する。
（本文と書体を変えればよいということでアンダーラインでもよいということらしい）
② 著者名、var. sect.等は、ローマンで表記する。
③ 種形容語、変種形容語は、小文字で表記する。
④ var.は、ラテン語varietas(英語のvariety)の略。

属名、種形容語、変種形容語はイタリックで書く決まりですが、その昔、まだタイプライターで印字していた時代はイタリックが使えませんでしたので、代わりにその部分にアンダーラインを付けていました。

学名は記述するためのもの、読み方は自由！

では、トガクシソウ“*Ranzania japonica*”は何と読んだらよいのでしょうか。

意外に思われるかもしれませんが、実はどう読んでも構わないのです。学名は、話して伝えるのが目的ではなく、文献等に正確に記述して共通理解に資するための「記述語」なのです。そこで、命名のための厳密な規則はあっても、それを読むための規則はありません。学名はラテン語で書くのが原則ですから、ラテン語で読むのが基本と考えられますが、ラテン語以外の読み方をしても、何ら問題ありません。

たとえば植物ではありませんが、大腸菌の学名は、“*Escherichia coli*”です。これをどう読むか。アルファベットを使用している国では、それぞれの母国語風に読むことが多いですし、公用語がアルファベットでない国、たとえば日本では、「エシェリヒア・コーライ」とか、「エスケリチア・コリ」、あるいは“*E.coli*”「イー・コリ」、「イー・コーライ」などさまざまに読んでいます。つまり英語風でもラテン語風でもチャンポンでもなんでもいいのです。

要するに、文字の綴りは絶対に変えられませんが、読み方は各国の言語で構わないのです。ただ学会発表や講演などで発音して伝える場合は。英語風に読んでおけば無難でしょう。さいわいにもラテン語の発音は日本のローマ字式の読み方が近いといわれています。そこで、“*Ranzania japonica*”は「ランザニア・ジャポニカ」と読めば、かなりラテン語に近いはずです(確かなことは知りませんが…)。

ラテン語は日本語に近いってホントか？

ものの本によると、ラテン語の母音は a、e、i、o、u、y の6種類あり、y はドイツ語の u あるいはフランス語の u と同じように発音し、日本語のヤ行の半母音(英語の y)はラテン語では j または i で表音するといいます。また、フランス語のように発音しない文字は原則としてありません。

日本植物分類学会〔ニュースレター〕に、永益英敏氏(京都大学総合博物館)が書かれた「学名のラテン語」では次のように解説されています。

> 学名は基本的に「書き言葉」であり、それゆえにこそ世界各国で同じ綴りで扱われうるともいえる。中国語を発音し語らない日本のような周辺民族にも漢字が利用され続けてきたことを考えてみればそのことは理解できよう。しかしながら音声によるコミュニケーションにおいては学名を発音しないわけにはいかないのも事実である。そして残念なことに学名の発音について標準的な取り決めは存在していない。ラテン語をあたかも漢文のように国際的な文書や学術書に用いてきた西欧諸国においては、日本における漢字の音読みのように、それぞれ歴史的に用いられてきた慣用的な読み方があり、それは本来のラテン語(たとえば古典ラテン語)の発音とは異なるものである。
>
> (……)
>
> さて実際に植物学者は国際会議などでどのように発音しているかというと、わりといい加減である。いろいろな理由があると思うが、それぞれの国や言語によって読み方が違うというのが一番大きな理由であろうと思う。また、もともとラテン語やギリシア語由来ではない学名が多いのも統一的な読み方が期待できない理由であろう。もっとも学名の綴りが聞き手にもわかっていればよほど逸脱した読み方をしない限り大きな混乱はない。日本人にとっては、むしろ母音のないところに母音を挿入したりしないこと、l と r の区別をきちんとする、といったことの方が重要である。
>
> イギリス人の植物学者が、きちんと英語風ラテン語の発音をしているかというとそうでもない。先日、国際シンポジウムで発表していたキュー植物園(ロンドンのキューにある王立植物園)の友人の学名の発音が、古典ラテン語でも英語風ラテン語の発音でもなかったので聞いてみたところ、すでに中高校においてラテン語の講義はなく、ラテン語の読み方は我流だという。英語風のラテン語発音は母音の長短がわからないと正しく発音できないので学名に厳密に適用しようとするのは基本的にむずかしそうである。私は古典ラテン語風に発音するのを好んでいる。そのままローマ字読みすればいいので楽だし、英語風では日本語の中ではちょっと気取りすぎ(？)。もう 15 年ほども前になるが、キュー植物園に標本を見に行ったとき当時の標本館長の Lucas さんに「その発音はどこで習ったのか」と驚かれたことがある。古典ラテン語の発音はイギリスではなるほど言語学者くらいしか使わないのかもしれない、と思ったことであった。

というようなわけで、まちがって伝わらなければ、読み方はどうでもよいのです。

〔参考資料〕

- すみれ思考　いにしえより愛されてきた花　（2023年4月29日）
- 植物一家言　―草と木は天の恵み―　（2022年4月25日）
- 牧野富太郎を敬愛する詩人尾崎喜八　（2022年3月31日）
- 牧野富太郎　ムジナモを日本で発見　（2022年3月23日）
- 牧野新日本植物圖鑑　（2022年3月3日）
- 川崎哲也『サクラ図譜』出版記念原画展を観る　（2010年5月15日）